錦城高校新聞

題字　井口　文章

再刊　第４４２号

印刷・発行

錦城高等学校新聞委員会
編集室 2024

みんなでつくる
錦城高校新聞

一面：合唱祭お疲れさまでした！
今年の合唱祭を振り返る
二面：錦城スペシャル特集
錦城スペシャルって何？

クラスの絆を歌にのせて

合唱祭５年ぶりに通常開催

２月20日(火)、ルネ小平大ホールにて合唱祭が行われた。今回の合唱祭は５年ぶりに新型コロナウイルスの制約を設けずに開催することができ、美しいハーモニーがルネ小平に響き渡った。（編集部共同取材）

今までの練習の成果をルネこだいらに響かせる

開会式

緊張と期待の空気が場を包む中、「皆さんの青春の１ページになるような合唱祭にしたい」と開会式で語ったのは、合唱祭副委員長の高田大輝さん（２H）。「合唱コンクールではなく、合唱『祭』です。フェスティバルです！」と舞台の中央で高田さんがあげた声で、会場は大きな歓声と熱気に沸いた。全員合唱「マツケンサンバ」の間奏ピッタリに収められた先生方の紹介や盛り上げに、声量が一段と増した開会式。錦城生全員がやる気に満ちあふれた。

１学年の部

１学年の部では１Iがスキマスイッチの『奏』をしっとりと歌い上げ、銅賞を獲得した。銀賞は１J。アンジェラ・アキの『手紙 拝啓十五の君へ』を歌った。男声と女声のハーモニーが美しく、会場からは感嘆の声が聞かれた。

１年生の金賞に輝いたのは１B。クラスの小村昌史くんが作詞・作曲を担当した『Our Way』を見事に歌い上げた。クラスの合唱祭実行委員を務めた小幡愛珠さんは、「小村君をはじめとするクラスみんなの協力あっての金賞だったと思います」と振り返る。B組では小村さんから昨年の12月ごろに「ただ、金賞を目指すのではなく合唱祭で伝説をつくりましょう」と呼びかけがあったそうだ。自作曲であるため、完成された見本が無く苦労も多くあったというが、『伝説を作る』を合言葉にクラス全体で一生懸命、練習に向き合ったという。小幡さんは「金賞が取れたことはもちろん、伝説ができて良かったと思います」と笑顔で話してくれた。

感動的な合唱を披露

２学年の部

２学年の部銅賞はRADWIMPSの『大丈夫』を歌った２E。華麗なピアノから始まり、始終きれいな歌声だった。銀賞に輝いたのは２L。嵐の『カイト』を大きな声量と美しいハーモニーで歌った。２年生の金賞をとった２Fの「コンパス・オブ・ユア・ハート」はディズニーのアトラクション「シンドバッド・ストーリーブック・ヴォヤッジ」を再現したステージだった。

私たちに呼びかけるシーンや指揮者が入れ替わるなど目を引かれる場面が多かったが、これは実際のアトラクションを再現することを意識して作ったからだそうだ。

閉会式

閉会式の前には先生たちによる『マツケンサンバⅡ』の合唱が行われた。音楽科の新指揮者の佐藤実苗さんと鈴木恵祐さんは二人で指揮者という珍しいパフォーマンスについて「立候補の時に２人とも手をあげて、HR委員という共通点もあって、争いたくなかったので２人で指揮をやるという選択をしました」と語った。会場をディズニーの世界観に引き込む最高のパフォーマンスだったが、金賞をとれる自信はあまりなかったようで、合唱曲ではないという引け目も感じていたそう。

鈴木さんは「２Fのみんなのおかげ」で取れた金賞だと笑顔で話してくれた。佐藤さんも昼の時間や放課後もたくさん練習したことで得られた結果で２Fのみんなで出ることができてよかったです、と金賞を振り返った。

閉会式ではまず、審査チーフの大政咲耶さん（２E）によって結果発表が行われた。１年生、２年生共通で１人が選ばれる最優秀指揮者賞と伴奏者賞、各学年から選ばれる金賞、銀賞、銅賞がそれぞれ発表された。

最後には合唱祭実行委員長の中村裕香さん（２K）が閉会を宣言し、今年度の合唱祭は野将之先生の独唱から始まり、その後に多くの先生が歌いながら出てきた。その中でも太田剛先生や榎本拓真先生など４名は法被をきており、福本拓也先生はカラーコーンを持って登場するなど、とても派手な演出がいくつも行われた。会場からは、先生の名前を叫んだり、歓声が飛びかったりするなど、観客は大きな熱狂を見せた。

また、曲の途中には合唱祭実行委員が壇上や客席の横などに登場し、踊り始め、会場はより一層大きな盛り上がりを見せた。

最優秀指揮者・伴奏者賞

最優秀指揮者
１B　小村昌史さん

自身で作曲した『Our Way』を指揮し、見事最優秀指揮者賞に輝いた小村昌史さん（１B）。小村さんは、受賞の喜びを口にしたうえで、技術的にはまだ成長できると思うと自身の指揮を振り返った。受賞の秘訣を笑顔だと話し、「クラスのみんながずっと笑顔でいてくれたので、指揮者である僕の笑顔にもつながったと思います」と語った。

クラスを金賞に導く指揮

小村さんは、４月から１年間苦楽を共にしてきた１Bのクラスメイトに向けて、「クラスは離れてしまいますが、『Our Way』の歌詞のように自分の道を信じて突き進んでいってほしいです。みんな、今まで本当にありがとう！」とメッセージを送った。

最優秀伴奏者
２L　小嶋梨紗さん

伴奏者賞を受賞した小嶋梨紗さん（２L）にインタビューした。受賞した感想について「ただ、嬉しいです！」と語った。廊下で歩いていると「おめでとう」と声をかけてくれる友達もいるという。伴奏においては歌とテンポを合わせることが大変だったそうだが、指揮者が隣で手拍子をすることで上達したそうだ。

また、何度も練習を重ねることで感覚的に覚えることができたという。自身のクラスも賞を受賞したことについて、「クラスの合唱祭委員がすごく頑張ってくれたので感謝の気持ちでいっぱいです！」と笑顔で答えてくれた。（蘭・蛋）

委員長「一から作り上げた合唱祭」

今年の合唱祭実行委員長を務めた中村裕香さん（２K）は「５年ぶりに何の制限もなく合唱祭が開催できたことが嬉しいです」と語る。前例を見たことがなく一から作り上げていく形となった今回の合唱祭だが、全員合唱などみんなが盛り上がってくれて良かったと振り返った。

合唱祭当日までには、新たな審査方法や「マツケンサンバ」で踊る振り付け、タイムスケジュールや「めくり」の用意など、実行委員は様々な準備を重ねてきた。特に審査方法については、先生と一部生徒しか投票できなかった従来のスタイルから、先生と生徒全員が投票できる形に変更した。

休憩時間での全員投票を実現させるため、「紙にマークする」という今回のスタイルの他、多くの案を出して考えたという。一つの投票箱に生徒全員が投票すると混雑が生まれてしまう、ネットワークは会場となるホールでは使用できない、など試行錯誤を重ねたそうだ。また「実際の集計の際には、実行委員が手で投票を数え、エクセルで総合得点を出しました」と教えてくれた。

前日まで緻密に重ねてきた準備と委員同士の協力により、当日はノートラブル、完全オンタイムで合唱祭が進められた。ただ、一方で準備が後ろ倒しになってしまったことがあることを中村さんは今回の反省点として挙げている。

来年の合唱祭への想いを中村さんに聞くと、今年度は合唱『祭』としてみんなに楽しんでほしいというコンセプトであったことを述べたうえで「行事を楽しむ雰囲気が来年も続いてくれたらいいなと思います」と語った。（晋）

	1学年の部	2学年の部
金賞	1B『Our Way』	2F『コンパス・オブ・ユア・ハート』
銀賞	1J『手紙 ～拝啓十五の君へ～』	2L『カイト』
銅賞	1I『奏』	2E『大丈夫』

むらさき草

先日、自宅に「大切なご案内」と書かれた杉並区役所からの封筒が届いた。杉並区に住む０～18歳の子どもを対象とした、子どもの居場所意識調査だった▼「家や学校以外に『ここに居たい』と感じる居場所や好きな場所はありますか」という質問に答えているとき、理由の選択肢の一つである「無料または安価で過ごせるから」という文言に目が留まった▼後日、何人かの友人にも聞いてみたが、やはり休日に家以外で過ごすとしたらカラオケや映画館、テーマパークだという答えが多かった。利用にお金がかかる場所ばかりだ▼一般的に、高校生ともなると小・中学生のころに比べて行動範囲が広がり、使うお金の額も増えることが多い。そう考えれば、休日の居場所として前述のような場所が多くなることも不思議ではない。だが、事情があって遊びに使うお金がない高校生は、どこで居場所を得ればいいのだろうか▼こども家庭庁の調査によると、「居場所がないと回答したこども・若者における、居場所がない理由」で最も多かったのが、40・６％を占める「住んでいる地域に、そのような場所がないため」という回答だった（参照：こどもの居場所づくりに関する調査研究報告書概要、令和５年）。小・中学生にとっての児童館のような、高校生が気軽に無料で利用できる場所は案外少ない▼杉並区には、「児童青少年センター（通称『ゆう杉並』）」という中・高校生のための施設がある。無料で様々な設備を利用でき、中高生のたまり場となっている▼区の意識調査の最後に「中高生が無償で利用できる施設が必要」と答えた。『ゆう杉並』のように中高生が無償でくつろげる場所が、私たちの暮らす地域にもっと増えていってほしい。アンケートに答えることで、行政に声を届ける貴重な機会になればいいと思った。（瑞）

プリンスによるプロポーズ💖

カラフルな服を着て拍手👏

ダイナミックな指揮！

合唱祭グラフティ！！

特集　謎に包まれた錦城スペシャル！

食堂の幻メニューを追ってみた

毎日食堂に行っている皆でもなかなかお目にかかれない錦城スペシャル。「本当にあるのか」や「幻のメニューではないか」と思っていた人もいるかもしれない。今回、食堂に協力いただいて特集した。（編集部共同取材）

Ａセット　チーズハンバーグ

コクがあるデミグラスソースは学生のために多く盛られている粒が立ったあったかいご飯とも合い、食べ進める手が止まらなくなる！

Ｂセット　おろしハンバーグ

おろしソースが肉の重厚感を緩和してくれるため、非常にさっぱりとしていて食べやすい。和洋どちらも楽しみたい人におすすめ。

今回、新聞委員会では食堂にお願いして、特別に錦城スペシャルを用意してもらい、実食に成功した。錦城スペシャルにはいくつかのメニューがあるが、２月某日お昼の食堂にて、ハンバーグのＡ・Ｂセットをいただいた。

チーズハンバーグ

最初に手を付けたスープはほんのりと温かいコンソメスープだった。柔らかい玉ねぎとニンジンが入っており、それはどこか私たちにはもう過去のものとなってしまった給食を彷彿とさせた。

次に手を伸ばしたのはメインディッシュ、チーズハンバーグ。一口入れたとたんに感じる肉々しいハンバーグはチーズと相性抜群！そして、同じプレートに乗っているのはみんな大好きナポリタン！トマトソースがよく絡まったナポリタンにはベーコンや玉ねぎなど王道を行く材料で作られていた。これがどこか洋食店の雰囲気を感じさせる。

和風おろしハンバーグ

ＢセットではＡセットと同じスープと付け合わせに加えて和風ハンバーグを堪能することができた。ハンバーグにはおろしソースがかかっているのだが、これが肉の重厚感を緩和してくれるため、非常にさっぱりとしていて食べやすい。Ａセットのチーズインハンバーグとはまた違った側面のハンバーグを味わうことができる。また、１枚のプレートでハンバーグの和と付け合わせの洋を同時に楽しむことができるため、食べ疲れることなく最後まで美味しくいただくことができた。

生徒の声を聴いてみた

実際に食堂を利用する錦城生の声を聞いてみた。

まず錦城スペシャルについて「機会があったら食べてみたいが売られているのが見たことがない幻の商品」というイメージがあるそうだ。次に「なぜ食堂を利用しているのですか？」という質問には「ドキドキ学生気分を味わえる！」「友達と一緒に食べたいから」といったほか、「週６で親にお弁当を作ってもらうのは申し訳ない」など、親の負担を考慮した回答がたくさん集まった。また、食堂のいいところについて聞いてみると、みんなで集まることができたり、開放感のある空間で食べたりできるという利点が挙げられた。また、小・中学校の給食と比べて、食べたいものが選べることも食堂のお気に入りのポイントとして挙がっている。

最後に、食堂への要望を錦城生に聞いてみた。すると「並ばなくていいようになってほしい」「カウンター席がほしい」などの大胆な意見や「購買で売っているチャーハンに箸ではなくスプーンをつけてほしい」など細部への要望も得ることができた。

今回のアンケートを通して食堂が錦城生、ひいては保護者の生活を支える存在であることを再認識した。これからも、食堂が錦城生たちに愛される光景を見続けたい。

今回、お忙しい中取材にご協力いただきました食堂の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

お昼の食堂の様子（加工しています）

明かされる錦城スペシャルの謎

錦城スペシャルの秘密を解明すべく、我々新聞委員会は食堂で働いている藤田麻美子さんに話を伺った。藤田さんによると、コロナ禍以前はランチＡ・Ｂという名前で提供されており、錦城スペシャルというメニューはなかったそう。ランチメニューは毎日売り切れが続出するほどの人気メニューだったそうだが、コロナの流行が始まって以降、食堂そのものの利用者が減少し、次第にランチメニューも余るようになっていったという。そんな中、何とか食堂に来てもらうきっかけをつくるために名称をキャッチーなものにしようとランチＡ・Ｂという名称から錦城スペシャルに変更された。

取材に応じてくれた藤田さん

現在では月に一度ほど10食前後限定で販売されている。販売された日にはすぐに売り切れてしまうほどの人気商品だそうで、藤田さんは「早く来た先生方がその日の分をほとんど食べてしまうこともあります」と話す。最近は物価高の影響もあり、食堂は赤字の状況が続いているという。しかし、そんな厳しい状況の中でも生徒に寄り添う姿勢は変わらない。藤田さんは、「物価高に伴って値上げしたい気持ちは大いにあるのですが、生徒の皆さんに美味しいものを少しでも安い価格で提供したいという思いから価格は据え置いています」と語る。

錦城生に向けて藤田さんは「みんなが食堂を利用してくれて元気な姿を見せてくれるのはとてもうれしいです。４月以降はコロナ禍以前のメニューも復活させられるよう頑張るので、より足を運んでくれたら嬉しいです」と錦城生にメッセージを送った。厳しい状況の食堂を応援する意味でも是非、積極的に足を運んでみてほしい。（蘭）

１年切り抜き新聞 高校の部最優秀賞受賞

東京新聞主催新聞切り抜きコンクール 2023 授賞式に出席

「自分で現状に疑問を持ち、多角的に向き合うことが重要」

社会と向き合った作品で受賞

２月18日（日）第20回新聞切り抜き作品コンクール（東京新聞主催）の表彰式が東京都千代田区の東京新聞（中日新聞東京本社）で行われた。錦城は１年生３名が高校生の部で最優秀賞、入賞、努力賞をそれぞれ受賞し、最優秀賞の橋本明季さん（1D）が出席した。また、優れた指導教諭に贈られる「いきいき学習賞」を社会科の石井智先生、茂木慧先生が受賞した。橋本さんは、社会人の姉が日々忙しなく働く姿から高校生の今だからこそ「働く」ということを見極める価値があると感じ、「働く―日本の現状―」をテーマに選んだ。制作を通して「誰かに言われずとも『自分で』今ある現状に疑問を持ち、その疑問と多角的に向き合う重要に気づかされました」と語ってくれた。

「相手の思いを受け止める」取材のプロ語る

授賞式後に、東京新聞編集局読書部の東松充憲さんにお時間をいただいて、本職の新聞づくりのコツを伺った。取材のプロである東松さんは、取材相手の話の本質を引き出す秘訣を「相手の想いを正確に受け止める気持ちで一生懸命聞くことだと思います」と話してくれた。記者と取材相手の感覚は違うため、相手の意見を「自分の色」で受け止めてしまうと、当たり前のように認識の齟齬が生まれてしまう場合があるという。

「自分が、相手の話したことで染められるような感じで話を聞く。そうすると『こういうことかな』っていう風に思う気持ちが起きます」と話す。取材と言うのは二者間の感覚を「すり合わせる」ことに似ていると語る東松さんだが、ときには政治家や犯罪の容疑者など、都合の悪い内容を隠したい人に取材をすることもある。喧嘩のような言葉のぶつけ合いによって取材相手が感情を露わにした中に、相手の本当の言葉が見つかる、という東松さんのお話に、記者としての真髄を見た。さて、今回のインタビューの中でもう一つ印象的だったのが「自分が思った通りに伝えてください」という東松さんの一言である。本取材をどんな風に文章で伝えればよいか緊張していた編集部の部員に、東松さんが微笑みながらかけてくださったお言葉だ。自分の記事を信じられるのはひとえに、取材相手に最大限歩み寄る姿勢と信念があるからに他ならない。先の「相手の想いを受け止める気持ちで一生懸命聞く」という発言からも、東松さんの取材相手への誠意やプロ意識がうかがえる。

「相手の想いを受け止める気持ちで一生懸命聞く」とアドバイスをいただいた

最後に、東松さんから錦城生に向けてメッセージをいただいた。「本を読むのが一番大事です」。勿論新聞を読むことも大切だが、新聞しか読まないことはよくないと東松さんは語る。内容とじっくりと向き合うことになる読書をすることで、勉強にもきっといい影響が出てくると思います、とアドバイスをくださった。今回、突然の取材にもかかわらず快く受け入れてくだった東松さんに心より御礼申し上げます。（瑞・普）

陸上部こだいら駅伝で快挙！

一般男子、一般女子の部でともに優勝

みんなで分かち合う勝利の喜び（写真陸上部より）

２月４日（日）に、小平市中央公民館を起点として４人でのタスキリレーを行うこだいら市民駅伝が開催された。錦城の陸上部からは男子４チーム、女子２チームが出場し、男子Ａチームが一般男子の部で優勝、女子Ａチームが一般女子の部で優勝、Ｂチームが３位に入賞した。一般男子の部、一般女子の部ともに優勝したのは創部以来初の快挙だという。男子Ａチームの矢部心平さん(2F)は、当日の走りを「１年生による新星の力と、２年生の意気地とが織り交ざった走りでした」と満足気に振り返った。また、チームのメンバー同士で競いながら練習していたという女子Ａチームの早川愛花さん(2L)は「練習のときから皆で気合を入れていたので、それが今回の結果にもつながったのだと思います」と語る。今回は修学旅行から帰ってきてすぐ本番を迎えることになっていたため、早川さんたちは修学旅行中にも体力が落ちないように筋トレなどを行っていたそうだ。早川さんによると、陸上部では現在「冬季練習」を行っているという。「今は体力をつけて、またシーズンに入った時に個人それぞれでベストを出せるように頑張りたいです」と次のシーズンへ向けて意気込んだ。（瑞）

卒祝会

59回生　卒祝会

3月14日（木）第一体育館

14：00～予定

1，2年生も入場ＯＫ

生徒会動静

２月19日　合唱祭実行委員会

２月21日　代議員会・中央委員会

２月25日　テレ東「田村淳の『TaMaRiBa』」放送

２月26日　中央委員会出演

２月26日　中央委員会